

特集2 座談会

先生は、なぜ宿題を出すのか

子どもにとって、「宿題」は毎日少しずつ基礎学力をつけるための大切な学習機会のひとつ。教育のICT化が進む中、「宿題」への取り組み方も変わっていくのでしょうか？また、先生は「宿題」を通して子どもの何を知るのでしょうか？元校長先生のみなさんからお話を伺いました。

HPIにも座談会の様子を掲載しています。宿題だけでなく、家庭での学習や今の子どもたちに身につけてほしい学力等について語っていただいています。

HPIはこちら



勉強する習慣を身につけるために

先生方にとって宿題を出す目的の一つは、勉強をする習慣を身につけてほしいということだと思います。学年が上がるにつれて、学習内容は広く深くなっていきます。その定着を図るためには家庭での学習も必要になってきます。低学年のうちから、家庭で学習する習慣をつけ、徐々に学習時間や方法に工夫を加えていければと思います。私が教員であった時代は30年ほど前になりますが、子どもたちの学力もいろいろですので、誰もが時間や労力をかければ出来ることを宿題の内容の基本としていました。例えば、漢字や九九など反復練習が必要な

もの、国語の予習としての言葉の意味調べなどがそれです。教科書を声に出して読む「音読」もよく出していました。最近、共働きの家庭が増えていることや、低学年から塾などに通う子どももいることから、家庭以外での場所で放課後を過ごしている子どもが多いように思います。保護者の方が忙しい中、子どもの宿題を見るために時間を割くのは難しいでしょうが、音読であれば、何か他の事をやりながらでも聞いていただけるかなと思います。家庭での学習も、保護者の方に見守られていると子どもたちが感じられることが大切なことだと思います。



元大阪市立小学校校長 松本杏子さん



元大阪市立小学校校長 川野喜代さん

宿題も主体的に取り組む、今の教育

私が現職の教員だった時には、いわゆる本を読んだり、漢字を書いたり、計算ドリルをしたりといった、少しずつステップアップして基礎学力を定着させるための宿題を出すことが多かったと思います。今の学校現場を見ると、教科書自体が、子どもが主体的に勉強を進めていけるように作られていますので、宿題についても、子どもが主体的に取り組めるようになっていきます。例えば、理科の教科書には二次元コードがついていて、家に持って帰ったタブレットで二次元コードを読み取ると、ウェブページ上で理科の実験の様子を見ることが出来ます。先生方

も教材をよく研究されていて、子どもがいよいよ宿題をやるというよりも、先生が「調べてごらん、おもしろいよ」と子どもたちに学びを勧めていきます。ドリル等で基礎学力を培った上で、子どもの様子を見ながら宿題を出しているなあと思いますね。教育のICT化が進む中で、保護者の中で「子どもたちに学力がつくのかな」と、疑問視される方もおられると思うのですが、現場の先生たちの話を聞くと、今の子どもはICTに慣れており、テストなどの結果から見ても、大人が思うよりも学力はついていっているように見受けられます。

宿題を通して子どもを知る手がかりに

自主学習の習慣化や家庭学習のきっかけとなるのはもちろんですが、先生方は宿題を点検したり、添削したり、質問したりすることによって、個々の子どもたちの学力を分析し、次への指導のための一つの資料を得ることが出来ます。また、子どもたちに作文や感想文を書かせたり、レポートをまとめさせたりして、子どもたちが書いた文章を読むと、子どもが何に興味を持っているか、他の子とは違う視点で感想を書いてきているとか、こういうところを面白く思ったとか、その子の興味・関心や感情がわかるんですね。そうすると、子どもへの理解が深まっていくんです。中学校では、卒業時に

は進路の問題が関わってきます。「あなたはこういうところに可能性を求めて、こういうところで将来頑張ってみたらどう？」とか、「こういう考えがあるのだったらこんな目標や夢があるんじゃない？」とか、これから何を目標・目的にして良いか漠然としている子どもに対して、宿題等で得たその子の興味や視点といった情報が、進路指導の一つのきっかけや手がかりになっていくんです。それを保護者の方と共有することによって、保護者の方にも子どもを応援してもらい、意識を高めてもらう、ということが出来るんじゃないかとも思います。



元大阪市立中学校校長 稲田純子さん